図書館だより

2026 年
1 月 30 日発行
秋草学園高等学校 図書館

2026 年もあっという間に 1 か月、あと 11 か月しか残っていません。などと後ろ向きになるのはやめて、高市首相のように馬車馬のごとく日々勉学に興味に過ごすのもよいかもしれません。ということで今年の十二支は「午(ウマ)」、図書館では「馬」の本を用意しました『ウマの動物学』(近藤誠司/東京大学出版会井/645-コ)『ウマと話すための７つのひみつ』(河田桟/偕成社/645-カ)。また、動物つながりで、犬・猫などの新着本もあります。馬車馬も否定しませんが、動物を眺めて考えて「のほほん・のんびり・ふわふわ」というのもいいことですね。

【速報】芥川賞・直木賞の受賞者は！？

第 174 回芥川賞・直木賞は 1 月 14 日に発表されました。

芥川龍之介賞

913.6-ト『時の家』鳥山まこと／著　講談社

一級建築士でもある著者が、築 40 年で取り壊される家の歴史を、専門の視点から描いた小説です。

913.6-ハ『叫び』畠山丑雄／著　新潮社

2025 年の大阪・関西万博と、1940 年に開催が断念された万博と、当時の旧満州のケシ(麻薬の原料)の栽培を絡めた構成になっています。歴史小説でもあり今日の小説でもあります。

直木三十五賞

913.6-シ『カフェーの帰り道』嶋津輝／著　東京創元社

大正から昭和の時代の、東京のカフェーの女給(従業員)たちのそれぞれの過ごし方を描いた小説です。

参考、第 174 回芥川龍之介賞 候補作

「貝殻航路」久栖博季／著　文學界 十二月号
「へび」坂崎かおる／著　文學界 十月号
913.6-サ『BOXBOXBOXBOX』坂本湾／著　河出書房新社

参考、第 174 回直木三十五賞 候補作

913.6-ス『白鷺立つ』住田祐／著　文藝春秋
913.6-ダ『神都の証人』大門剛明／著　講談社
913.6-ハ『家族』葉真中顕／著　文藝春秋
913.6-ワ『女王様の電話番』渡辺優／著　集英社

小説のマルチメディア化

933-ウ-1, 2　『プロジェクト・ヘイル・メアリー』(上下) アンディ・ウィアー／著　早川書房

映画の日本公開日がなかなか決まらずやきもきしていましたが、3 月 20 日に日米同時公開が決定しました。

映画の予告トレイラーを見て、映画公開まで待てないよという方、または、映画は準備万端で見たいという方は、ぜひ本書をお手にお取りください。

©水谷朱夏

地球の危機の解決を目的とした SF ですで、宇宙船内の描写は手に汗握ること間違いなし。そして、原作を読んでいない限り思いつくことのない、あっと驚く事実が……。

新着コーナーの気になる本

518-タ『僕の仕事はごみ清掃員。』滝沢秀一／著　河出書房新社

著者はお笑い・ごみ清掃員として、普段はテレビや SNS で断片的に「このゴミは」とやっていますが、この本ではゴミについて体系的にわかりやすく書いています。この本を含め「14 歳の世渡り術シリーズ」は授業形式で、みなさんの普段の生活の延長線で取り組める入門書です。今回、図書館では他の分野の本もシリーズでそろえました。

それにしても、『世の中にはごみとして生まれたものは一つもない……』という本の見返しのあおり文は何と哲学的なのでしょうか。

司書の今月はこの本読みました

成瀬シリーズ完結!!

本を読まない司書ですが、図書館だよりの担当になってまず読んだのが「成瀬シリーズ」でした。そして、『成瀬は都を駆け抜ける』(宮島未奈/新潮社/913.6-ミ-3)でシリーズ完結ということになりました。成瀬あかりを中心とした群像劇である短編集は、きちんと伏線回収で読後すっきり。でも「もう成瀬に会えないんだぁ」という気持ちも。

今回も、芋づる式に『夜は短し歩けよ乙女』(森見登美彦/角川書店/913.6-モ)と『四畳半神話大系』(森見登美彦/太田出版/913.6-モ)を読みました。なぜならば、宮島未奈さんがリスペクトしてやまない森見登美彦さんの作品の端々が成瀬の話に盛り込まれているからです。「黒髪の乙女」「魚肉ハンバーグ」など森見ワールド用語をみて「ああ、あれのことね、(クスッ)」というのをやってみたいゆえの芋づるです。【横関】